

古文

古文 日々の思い [随筆]

徒然草 兼好法師

亀山殿の御池に



講師 山本章博

学習のねらい

今回から『徒然草』を読んでいます。『徒然草』は、いつだれが書いたものなのでしょうか。まずは、作品の基礎知識を学びます。次に、「亀山殿の御池に」という段を読みます。水車をめぐる簡単なお話ですが、それを理解して、どのような教訓を読み取ることができるのか、考えてみましょう。

● 学習のポイント ●

- 〈一〉 『徒然草』について知る
- 〈二〉 二つの水車の違いを理解する
- 〈三〉 この段の教訓を考える

■ 『徒然草』について知る

『徒然草』の基礎知識

- 鎌倉時代末期の成立。
- 作者は、兼好法師。俗名（出家前の名前）は、卜部兼好。
- 随筆。全二百四十三段から成る。

〈序段〉

「つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」

〈現代語訳〉

退屈なまま、一日中、硯に向かって、心に浮かんでは消えていくたわいもないことを、なんとなく書いてみると、不思議と気が変になりそうだ。

■ 二つの水車の違いを理解する

後嵯峨上皇は、亀山殿と呼ばれた御所の池に大井川の水を引き入れようとして、水車を造らせることになりました。大井の住民に造らせたところ、お金と時間をかけたにもかかわらず、出来上がった水車はまったく回りませんでした。あれこれ修理しても直らず、そのまま放置されることになりました。そこで、宇

治の里人に造らせたところ、いとも簡単に造って、水車は見事に回りました。大井の人は水車造りに失敗し、宇治の人は成功しました。これがこの段の内容です。

【重要語句】

- いたづらなり（形容動詞）……役に立たない。無駄である。
- めでたし（形容詞）……見事だ。素晴らしい。

■この段の教訓を考える

なぜ宇治の里人は、いとも簡単に水車を造ることができたのでしょうか。宇治には宇治川が流れていて、水車が多い所として有名でした。つまり、宇治の人々は、水車を造ることに熟達していたのです。

兼好法師は、この段の最後に、「何ごとにつけても、その専門に熟達している者は、たいしたものである。」と言っています。どんな分野であっても、専門的な知識や技術は、素晴らしいものであり、広く人の役に立ちます。専門的な熟達した技術を身に付けることの素晴らしさを教えてくれる段です。

【重要語句】

- やんごとなし（形容詞）……捨てておくことができない。たいしたものだ。貴重だ。



古文

徒然草

兼好法師

亀山殿の御池に

講師
山本章博

亀山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車を造らせられけり。多くの錢を賜ひて、数日に営み出だして、掛けたりけるに、おほかた廻らざりければ、とかく直しけれども、つひに回らで、いたづらに立てりけり。

さて、宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかに結ひて参らせたりけるが、思ふやうに廻りて、水を汲み入ること、めでたかりけり。

よろづに、その道を知れる者は、やんごとなきものなり。

【第五十一段】

【現代語訳】

(後嵯峨上皇は) 亀山御所のお池に、大井川の水を引き入れなさろうとして、大井川沿いの住民にお命じになって、水車をお造らせになった。多くの金銭を与えになって、数日間をかけて造り上げて、取り付けたところ、まったく回らなかった。あれこれ修理してみたけれども、結局回らないで、(水車は) 何の役にも立たずに立っていた。

そこで、宇治の里の人々をお呼びになって、お造らせになったところ、やすやすと組み立てて(上皇に) 差し上げたが、思いのままに回って、水を汲み入れることが、見事であった。

何ごとにつけても、その専門に熟達している者は、たいしたものである。